

天草キリシタン史

―天草島原の乱前後―

1604 慶長9 9・ この頃、長崎ではキリスト教が盛んになり、仏寺ごとごとく廃絶する。

1605 慶長10 4・16 徳川秀忠、征夷大將軍となる。

4・26 幕府、松浦鎮信、有馬晴信、五島玄雅、鍋島直茂等に南蛮渡航の朱印を授ける。

7・1 幕府、島津忠恒等に安南渡航の朱印を授ける。

※安南^{ベトナム}の旧称。中部ベトナム王朝を指し、日本人町ができ、朱印船が往来した。（日本

史辞典）

この年 領主寺沢広高、幕府の意を慮り、番代に命令し、郡内各所の教会堂を毀し、十字架を倒し、禁教を強制する。そのため、志岐、上津浦の司教館のみ残存し、パードレ5人、イルマン2人在住する。

※パードレ^{神父}、イルマン^{修道士}

1607 慶長12 この頃 天草全島中、志岐、崎津、上津浦の3カ所に天主教会堂存在し、パードレ3人、イルマン2人在住する。

1609 慶長14 1・11 八代にて、ミカエル三石彦右衛門、その子トマス（11歳）とペテロ（6歳）、ヨハネ服部甚五郎殉教。4本の槍に刺されて首級は町の東門に晒される。一宗徒が密かに遺骸を盗み出し、天草の柳浦に持ち来て、さらに上津浦に移して埋葬する。

1611 慶長16 6・24 加藤清正死去。50歳。

この頃 細川忠利、禁教に転じる。

1612 慶長17 3・14 幕府、京都の天主教会堂を毀し、布教を禁じる。

この頃 天草には、志岐、上津浦の2会堂のみ存続し、パードレ、イルマン一人づつ在住する。

3・22 家康、島原城主有馬晴信、岡本大八事件に関し、その封を解き、甲斐に流す。

5・6 有馬晴信、切腹を命じられる。(46歳) ただし、晴信の子直純は家康の曾孫の婿のため、島原城主となる。

1613 慶長18 2・ 家康、キリスト教を邪宗と称し、全国に禁令を布く。

5・ 幕府、切支丹宗門取締規則を發布する。新たに宗門改めの制を設け、庶民をしてことごとく仏教のある一宗に帰依させる。僧侶には宗旨公認の特権を与えて、各寺に宗門人別帳(宗門帳)を備え置き、檀徒の宗旨を一々これに記し、婚姻、死去、旅行等に至るまで、逐一管理する策をたてる。

12・ 富岡番代川村四郎左衛門、上旨に従いキリスト教徒の検挙に着手、宣教師には退去を命じる。

上津浦駐在のイルマン、ママコスこの月に未鑑の書を残して去る。

1614 慶長19 1・ 諸大名幕府の命を奉じ、領内キリスト教徒の禁圧にかかる。

富岡番代川村四郎左衛門、引き続き教徒弾圧に専念する。志岐の教会堂を破壊し、パードレ、ガルシヤ、ガルセスに退去を命じ、かつ富岡のアダム荒川を捕え過酷な拷問を続ける。

この頃 領主寺沢広高、特に一向宗の郡内仏教を公認し、番代をして切支丹の転宗者は、ことごとくこれに入れる。そのため同宗の郡中進出めざましく、東西両派を合わせて25ヶ寺を数えるにいたる。

- 2・ この月に入り、切支丹宗徒大追放。高山右近、内藤如安等続々長崎に護送される。
- 3・ 長崎のキリシタン教徒、百方手を尽くしこれら追放赦免の運動を試みるも何等効果なし。
- 4・ 1 長崎のキリシタン教徒等、最後の手段として、大々的宗教行列を行う。行列は、この日より21日まで10度行われ、殉教者の装いをする数千の教徒が街々を練り廻り、各キリシタン寺院を歴訪、その状態は悲壮を極める。
- 6・ 5 その日の早朝、アダム荒川を志岐の刑場に曳き、首刎ねの上遺骸は海に投じる。(60歳)
- この頃 相次いで佐伊津村を脱出した伝道師ソテロ工藤(52歳)、口之津にて殉教し、志柿村のトマス永野仁右衛門(31歳)、ドミニコ永野与一(27歳)兄弟は斬首の厄に遭うなど、迫害の手は次第に東筋へ伸びる。
- 9・ 24 上使山口駿河守友直下向し、この月中旬長崎に着き、教徒追放の急速断行を督促する。よってジャンク船3艘を艤装し、教徒をそれぞれ分乗させ、一艘はマニラに向け、他の二艘はマカオに向け、この日出帆する。右近、如安等はマニラ行に、宣教師の一团はマカオ行に振り当てられる。もともとその内若干名の宣教師は、長崎港を遠く離れないところ辺から、島影より漕ぎ寄せた信者の迎船に乗り移り、ひそかに立ち戻る者もある。
- 9・ 山口駿河守友直、令を鍋島、寺沢、有馬、松浦、大村の五大名に伝え、長崎のキリシタン寺院を破却させる。
- 1615 元和1 1・ 富岡番代川村四郎左衛門、なおも教徒迫害の手を緩めず、更に上津浦教会堂を破壊し、留守居の住持(一向宗僧侶)を退去させる。
- 2・ 5 高山右近、マニラにて病没(60歳)

5・8 大坂夏の陣・豊臣氏滅ぶ。

9・9 幕府、朱印船を限定する。

1616 元和2 4・17 徳川家康死去。(75歳、奉号安国院殿東照宮)

8・8 幕府、キリスト教を厳禁し、唐船を除き、外国商船の長崎、平戸のほか寄港するのを制禁する。

この年 松倉豊後守重政、和州郡山より国替えし島原城主となる。 ※和州⇨大和の国 現在の奈良県

1617 元和3 この年 フランシスコ・バシエゴ・ヨハネ、パプチスタ・ゾラ・ヨハネ、ダ・フォンセカの3神父及び

邦人宣教師ジュリアノ・デ・中浦来島し、志岐、上津浦を巡回する。

※ジュリアノ・デ・中浦⇨遣欧四少年のひとり・中浦ジュリアン・寛永10年穴吊るしの刑で殉教

イエズス会文書に、天草キリシタン指導者14ヶ村59名の記載有。

1618 元和4 松倉重政、森岳城(島原城)の築城に着手。

宣教師への宿提供を禁じる触れが出る。(禁を犯した者は火刑に処し、宣教師の発見者には銀30枚を与える)

1620 元和6 天草河内浦に「竹の籠の獄舎」迫害。

アントニオ・ジャノネ、天草下島大江に潜伏。

1621 元和7 この年 七代富岡番代として三宅籐兵衛着任する。(千石)

この年 ミカエル・カルヴリヨ神父、日本潜入に成功し天草に来る。宗徒の家に潜伏し、日本語を習得する。

マテウス・デ・コロウス神父、大江、崎津で布教。

崎津にコンフラリアの組織。

1622 元和8 天草四郎、益田甚兵衛の子として宇土で出生（推定）

1623 この頃 天草在住のパードレ二人。一人は大矢野に在。

この年 ミカエル・カルヴリヨ神父天草を去り、大村に赴いたところを捕えられ、獄につながれる。

1624 寛永1 この年 二人の宣教師が天草に在る。特にパードレ・ポール・ゾウノは大矢野を地盤に熱心に布教をする。

この年 寺沢広高、將軍家光の意を受け、富岡番代に領内のキリシタンの取締りを厳しくさせる。そのため、ルドーウイコ六左衛門夫妻、大矢野にて殉教、神父ポール・ゾーノは肥後に追う。

この年 ミカエル・カルバリヨ、大村の獄より長崎に送られて火あぶりの刑に処される。

1625 寛永2 この年 島原藩主松倉重政、將軍家光の意を受け、家老に命じて領内のキリシタンを禁厭させる。このため、支部長フランシスコ・パシエゴロ、口之津で検挙され、長崎に送られて火あぶりの刑に処される。

この年 領主寺沢広高隠居し、嗣子堅高（17歳）が家督を継ぐ。富岡番代、三宅籐兵衛、賀儀のため唐津へ戻り、番代永勤の推挙を受け、家族同伴で帰富岡。

1626 寛永3 この頃 天草全島中、西目筋にパードレ二人在住する。

1627 寛永4 この年 長崎奉行竹中采女正重義、島原キリシタンの大検挙にかかり、天草大矢野の信徒も若干これに連座して、殉教する。

1628 寛永5 5・5 重ねて、切支丹の禁令が出て、長崎キリシタン処刑を長崎奉行水野守信に命令する。

1629 寛永6 1・キリスト教会派遣のパードレ二人、ミカエル松田、ペテロ・カイス天草に来る。郡内特に志岐

より西目筋、大江、崎津と巡回する。

1・ 踏絵の令を発し、長崎にて実施される。踏絵には木版が用いられる。

6・ 富岡番代三宅籐兵衛、唐津より帰任する。途中長崎奉行とも諸事談合を行い、断固弾圧の臍を固め帰城する。帰城後、ただちに三郡代に出岡を求め、各村役を督励し、強制の手段に出ることを特命する。

7・15 幕府、長崎のキリシタン教徒すべて仏教に帰教したとの報に接する。

7・ 長崎奉行竹中采女正父子、キリスト教徒を捕えて島原温泉地獄の熱湯に投げ込む。

7・ 天草でもこれに呼応して、この月より大々的に検挙迫害に着手する。手近の富岡志岐より始めて町役人トマス用左衛門の子ドミニコを流罪に処し、志岐教会堂の門番ジュリオ（82歳）を海に投げ込む。また同地方の婦女子210数名を投獄し、その親等に棄教を迫る暴挙にでる。

8・ 河内浦（二町田）の郡代では、信徒の子供等を竹籠に入れ、雨日に晒し、断食12日におよび、もってその一家の翻意を促す。更に検挙の網を拡大し、迫害の手は大江崎津に伸ばし、軒別に臨検を強行、否応なしの棄教に及ぶ。一月来島のパードレ二人も、迫害を受け、退去する。

原マルチノ、マカオで死去（57歳）。

1630 寛永7 1・20 朝鮮人パウロ（60歳）、志岐にて生きながら海中に沈められる。

11・16 島原藩主松倉重政死去。（57歳）嗣子勝家襲封する。

12・20 一町田村にて、ミカエル・井伊武左衛門（70歳）海に投げられる。（元和7年説あり）
この年 幕府、キリスト教に関する書籍の舶載を禁じる。

この年 天草切支丹宗徒の検挙迫害なお持続され、所々に悲惨な殉教者を出す。

この年 富岡番代三宅籐兵衛、キリスト教徒収容のため、富岡郊外野中（過書場くわそばあたり）に牢獄を建てる。

1631 寛永7 この年 長崎奉行竹中采女正父子、長崎稲佐の海岸に大釜を据え、潮湯に硫黄を混ぜ、温泉岳の熱湯に

交えてこれを以って教徒を責め苦しめる。

1632 寛永9 1・24 徳川秀忠死去。（54歳、奉号台徳院殿）

5・ 切支丹及び奉書船以外に、外国渡航禁止の高札が長崎に建つ。

この年 長崎にて絵踏板、同町鋳物師裕佐の考案した青銅版に改められる。

この年 富岡町役人トマス用左衛門の妻ヨネス、下男ヨハネ迫害され、生きながら海に投ぜられる。

1633 寛永10 2・28 幕府、奉書船を除くほか、海外各国への渡航を厳禁し、かつ在外邦人帰朝の処罰方を定める。

4・11 先の領主寺沢広高死去。（71歳）

9・16 先に三神父を伴い天草巡視に及んだジュリアノ・デ・中浦捕らえられ、この日長崎で倒吊しの刑を受け殉教する。（66歳、62歳説有）

1634 寛永11 5・25 重ねて邦人海外渡航、並びにキリスト教厳禁の令を布き、長崎に出島を築き、在留オランダ人をこれに移すこととする。

1635 寛永12 6・21 幕府、武家諸法度を定める。

6・3 参勤交代の制を確定する。

9・6 幕府、キリスト教を厳禁の令を発し、さらに検挙するよう強要する。

1636 寛永13 5・19 幕府、鎖国令を布き、邦人の海外密航及び帰朝者は全て死刑とする処罰方を定める。

5・ 長崎出島竣工、オランダ人全てをこれに隔離する。

1637 寛永14

この頃 長崎に在住の南蛮人との混血児287人を海外に放つ。

6・ この月半頃から天草全島にズイソのうわさが盛んに飛び交う。

※ ズイソ最後の審判。中世のキリシタン思想で、終末思想感か。一揆の指導者が流した廻文に世の終わりの審判で地獄へ滅ぼされてしまわないために、キリシタンに立ち返らなければならない、とある。

8・11 阿蘇山噴火し、砂石硫黄が降る。同月17日も同じ。

9・ 連日天焼け、狂い花咲く。

宇土郡江部村に住む小西家遺臣益田甚兵衛の子四郎（16歳）、天草大矢野に迎えられ、姉婿渡辺佐太郎（上村庄屋渡辺小左衛門の弟）方に寓する。

10・ この月初め、四郎等中村鮫ヶ浦太郎助方に移る。種々の奇蹟を現す。

10・7 四郎、教主に擁立させられ、中村の宮津に道場を構え、天草四郎時貞と称する。巨頭大矢野松右衛門、千束善右衛門、森宗意等これに侍する。

10・20 島原並びに天草の百姓間に動揺の色がある。

10・22 天草では、番代及び郡代の命により、村役の者村々に出張し、船着場に番所を設けて往来のものを調べる。

10・23 島原領有馬村北岡の百姓等、700余人が集まる。

10・24 島原城の留守家老、部下を遣わしその首領を捕縛する。

10・25 有馬原尾のキリスト教徒蜂起し、代官林兵左衛門を撲殺し、北岡屯集の農民勢800余と合体、一気に島原城へ押し寄せんとする。

- 10・26 幕府、5人組の制を厳しくする。
- 10・27 天草でも、大矢野、上津浦辺の教徒等蠢動する。この日、熊本藩兵川尻に出張し、同港を警備する。
- 10・29 富岡番代三宅籐兵衛、手兵100人を率いて本戸へ出陣、同地郡代役所に入る。この日、熊本藩よりは兵を派遣し宇土郡三角港を固める。
- 10・30 たまたま天草方教徒の大立物、大矢野中村庄屋渡辺小左衛門（27歳）、従者とともに四郎の母姉妹迎えのため、宇土郡江部村に至り、同村庄屋郡浦彦左衛門を訪ねたところを、その老母の偽計に引っかかり、遂に熊本藩兵の手に捕らえられる。この夜、大矢野勢秘かに海上より江部村をうかがう。
- 11・1 四郎の母（天草方幹部千束宗右衛門の妹）及び姉妹等縛られ、渡辺小左衛門とともに熊本へ送られる。この日、島原方の大江源右衛門等大矢野宮津に来て、ここに天草島原の教徒連携が成立する。以来、数度の談合は、海上の孤島湯島にて行われ、今に談合島なる別名をもって呼ばれる。
- 11・2 渡辺小左衛門の父阿村庄屋山城伝兵衛、推されて小左衛門の跡を継ぎ大矢野勢の首領となり、中村の古城を修築してこれに籠もる。この日、番代三宅藤兵衛大島子に向かい、尖兵を配して上津浦勢の押さえに備え、即日引き返し本戸付近のキリシタン検挙にかかる。
- 11・4 四郎、島原へ迎えられ大江に渡る。天草方幹部50名これに従う。
- 11・5 天草島原の幹部連、相会して大評定をする。この日、寺沢堅高の手兵領内天草鎮定のため唐津を発つ。留守家老岡島次郎左衛門これを統率し、総勢1500人、鉄砲160挺、兵船37艘に

分乗する。

11・8 島原キリスト教徒蜂起の報、江戸に達する。

11・9 幕府、三河額田城主板倉重昌に討伐を命じ、目付石谷貞清をこれに付ける。この日、在符の寺沢兵庫頭堅高、松倉長門守勝家に早々帰国させる。

11・1 寺沢の唐津勢、富岡に着船する。

11・11 唐津勢、本戸に廻航し、三宅方と合体する。この夜、三宅籐兵衛諸將と会して諸般の打ち合わせを行う。

11・13 四郎、上津浦の危急を聞き、1500人を引率して島原より来援する。この夜、島原の別隊500人、兵船を連ねて来、鬼池をうかがう。ここより上陸し、本戸の背後を衝かんとするもの様子。しかし、海岸の守備が固いと見て、にわかに船首を上津浦の本隊を目指す。

11・14 四郎、未明に上津浦を発し、海陸両路より大挙来襲し、島子・本戸で唐津勢を破る。番代三宅籐兵衛重利、本戸広瀬にて戦死する。(57歳)

この夜、教徒勢広瀬の大矢崎に野営し、大いに凱歌を上げる。

11・17 教徒勢二江に結集し、富岡城を衝かんとする。島原勢も合流する。

11・18 四郎、兵を志岐にすすめる。

11・19 四郎、富岡城を攻めるが守りは固し。この日、板倉重昌大坂に着く。

11・22 四郎、再び富岡城を攻めるが抜けず。この日、板倉重昌大坂を出立す。

11・23 四郎、富岡城の囲みを解き、坂瀬川より乗船し、島原に向かう。枝隊の天草方は、上津浦に引き返す。

この頃 教徒勢が長崎へも押し渡るとのうわさにおびえ、市中騒然とし、老幼荷物を抱え逃げ出す。時に、長崎奉行榊原職直、神尾元勝ともに上府して不在のため、上下なすすべを知らず。町年寄高木作右衛門、高島四郎兵衛、高木彦右衛門、後藤庄左衛門等、代官末次平蔵方で会し評議をする。結果、応援を大村藩に請い、船番、町使、牢人等を使役して、市中要所の警備を固め漸く安心する。

11・27 幕府、更に老中松平信綱、戸田氏鉄を、教徒勢討伐のために派遣する。

11・28 板倉重昌、豊前小倉に着く。松倉勝家、島原に着く。

12・01 板倉重昌、肥後高瀬に着き、豊後府内の目付及び近国の諸大名と会う。

この日、教徒等原城址の修築にかかる。

12・3 四郎並びに幹部連が原城に入城する。天草大矢野勢中村を捨てて、これに赴く。

この日、松平信綱江戸を発つ。

12・5 板倉重昌、島原に着く。

この日、教徒勢入城する。寺沢堅高、兵800人を率いて富岡港に着く。

12・6 原城、修築なる。重昌、原城に向かう。

12・7 寺沢堅高、小島子に進駐し、付近を掃蕩する。ついで熊本藩兵の来るのを待ち、東西より上津浦を挟撃せんと留まる。

12・8 原城内、仮小屋完成。重昌、有馬へ着陣する。

12・9 天草上津浦勢、同所を引き払い、全員原城に入る。これにより、籠城の総勢は島原方2万3千100人、天草方1万3千900人、都合3万7千人となる。この日、攻囲軍隈田に結集する。

- 1638 寛永15
- 12・10 攻囲軍、原城を包囲し、一番攻め、鍋島、松倉の両勢押し出すも失敗する。
- この日、熊本藩兵が天草を攻める。兵数1万6千余、細川光利を将として、家老有吉頼母従う。しかし、教徒勢は既に島原に去っていたため、大矢野柳浦に兵船を寄せたまま、直ちに上津浦に廻航する。寺沢堅高もまた小島子より兵を進めて上津浦に押し入る。
- 12・12 攻囲軍、城中に投降の矢文を送る。この日、熊本勢上津浦を引揚、唐津勢は小島子に引き取る。もつとも、唐津勢手薄のため、熊本勢のうち二番隊を残し、加勢する。
- 12・14 熊本勢、川尻に帰陣する。
- 12・16 松平信綱、大坂に着く。
- 12・18 信綱、大坂より攻城用大砲を輸送する。鈴木三郎九郎重成、鉄砲の鍛錬があることによりこれの奉行となる。
- 12・19 信綱、大坂川口を出船する。
- 12・20 板倉重昌等二番攻めをする。鍋島、立花の両勢敗退する。
- 12・22 籠城軍、矢文を射って防戦の理由を釈明する。
- 12・27 板倉重昌、制令を出して、無断の先駆けを禁じる。
- 12・28 松平信綱、小倉に至る。
- 12・30 寺沢堅高、小島子に駐屯のまま越年する。
- 1・1 原城総攻撃を行うも攻囲軍惨敗。板倉重昌、突入してこれにより死ぬ。(51歳)
- 1・3 松平信綱、島原に着く
- 1・4 信綱、有馬に至る。

- 1・5 細川勢(肥後守光利、父越中守忠利の兵を率いて)有馬に着陣する。
- 1・7 堅高、天草より兵を引き揚げ有馬に着陣する。
- 1・10 信綱、海上より鉄砲で攻撃するが、意のままにならず。更に、投降の矢文を城中へ送る。この日、福岡の黒田勢、延岡の有馬勢、小倉、中津の両小笠原勢等着陣する。
- 1・11 将軍家光、西国大名細川忠利、立花宗茂、鍋島勝茂、有馬豊氏、黒田忠之等に帰国を命じて、攻城に参戦させる。
- この日、招きにより、オランダ船有馬沖に投錨する。
- 1・12 細川忠利、江戸を発つ。
- 1・13 オランダ船、海上より城中を砲撃する。
- 1・15 島原城番として小笠原耆岐守、久留島丹後守を富岡城番として伊東大和守、松平主税を置く。上使伊東大和守、松平主税、目付杉原四郎兵衛等天草に渡り、この日富岡に入城する。上使は二の丸、目付は出丸に詰め在番する。オランダ人、海岸砲台より城中を砲撃する。
- 1・16 城中より、オランダ船の砲撃に抗議する矢文飛来。
- 1・20 四郎の母姉妹等、熊本より有馬に召し寄せる。
- 1・22 四郎の甥小平を捕らえる。
- 1・26 オランダ船、また砲撃する。砲身破裂し、船員が惨死する。
- 1・28 オランダ船抜錨、帰帆に着く。
- 2・1 信綱、四郎の甥小平を城中に遣わし、渡辺小左衛門の投降状を渡させる。城兵はこれを謝絶する。

- 2・4 細川忠利、島原に着陣する。
- 2・5 立花宗茂、島原着陣。
- 2・9 鍋島勝茂、小笠原中真、小笠原長次島原に着陣。
- 2・10 この頃、城中では連日太鼓を打って鼓舞する。
- 2・11 信綱は日向の金掘夫に坑道を掘らしたところ、城内よりも穴を掘り進めていた。この日、穴が相通じたため、坑道内で会戦が起きる。城兵は、糞汁を流し込み、攻城軍を悩ませる。
- 2・15 教徒の山田右衛門が裏切り、延岡藩主有馬右衛門に内応の矢文を送る。城内は動揺する。
- 2・21 城兵が夜襲を決行する。城より出て、黒田、鍋島、寺沢の陣営を襲うが失敗する。この時、城中の糧食・弾薬無くなりつつある。
- 2・24 信綱は、糧食・弾薬尽きだしことを察知し、いよいよ総攻撃の部署を定める。
- 2・27 攻囲軍、総勢12万余、一斉に攻撃に入る。出丸、二の丸、本丸海手の一部墮ちる。
- 2・28 **原城陥落・天草島原の乱終結**
- 本丸陥落する。細川藩士陣佐左衛門、四郎の首を挙げる。諸兵競って教徒等を大虐殺する。老幼男女あまねく焼殺、刺殺、斬殺され尽くす。
- 3・1 原城を破壊し、諸勢引き上げる。
- 3・3 四郎の一族を悉く斬殺する。生け捕り者もまた同じ。
- 3・4 信綱、島原に赴いてこれを見分する。
- 信綱はまた、鈴木重成に諸勢引き揚げ後の残務整理を命じ、現地に留まらせる。
- 3・9 島原平定の報が、江戸に達する。

- 3・13 信綱、天草巡視のため宇土三角に留まり、大矢野へ渡海する。今夜は栖本泊まり。
- 3・14 信綱、栖本を発ち、本渡より海路中田に至り、河内浦(二町田)に泊まる。
- 3・15 信綱、河内浦を発ち、海路富岡に着船、一泊する。
- 3・16 信綱、富岡を出、肥前茂木に渡り、長崎に到着する。
- 3・30 信綱、平戸を経てこの日唐津に到着。城主寺澤堅高面謁し、城中において饗応する。
- 4・3 信綱、小倉に着く。一揆弾圧に列した諸将、相追って来会する。
- 4・4 島原城主松倉勝家の封を没し、唐津城主寺澤堅高の封を削り、天草を没収する。
- 4・13 幕府、高力忠房に肥前島原城を、山崎家治に肥後天草を与える。
- 5・12 松平信綱、戸田氏鉄江戸に凱旋する。
- 5・13 柳河城主立花宗茂帰府する。この日召されて將軍家光に謁し密話がある。次いで、松平信綱、戸田氏鉄將軍に謁し、征討始末を復命する。
- 5・28 山崎家治支配幕府、山崎甲斐守家治に天草富岡在城を命じる。
- 6・4 江戸より肥前に飛脚があり、鍋島勝茂の上京を促す。勝茂、5日に佐賀を発ち、6月23日江戸に着く。
- 6・26 幕府、鍋島勝茂、榊原職直を評定所に召して、その軍法を犯せし罪を問いたです。
- 6・29 鍋島勝茂、榊原職直に閉門を命じる。
- 7・19 前島原城主松倉勝家を斬罪に処し、唐津城主寺澤堅高に蟄居を命じる。
- 7・ 山崎甲斐守家治、備中成羽より来て、富岡に入城する。家老原田十兵衛、原田三左衛門従う。郡中総高、4万2千石、寺澤同様とする。家治、先ず城郭の修築に着手、城門外百間塘の石垣

築造を始め、船津より堀切に至る湊内石垣を改築、さらに堀切脇に大手門を進出新建して、これを境に内を城内、外を城外と呼ばせ、また堀切より西の海沿い城山際まで石垣をめぐらすなど、城の内外面目一新に務める。

8・幕府、ポルトガル人の渡来を禁じる。太田備中守長崎に下向し、ポルトガルとの交流禁止を伝えて、在留ポルトガル人に退去を命じる。そのため、出島の新設からわずか3年にして全く寂れ、平戸のオランダ館のみ栄える。

9・13 幕府、伴天連訴人に賞金を懸ける。

9・20 改めてキリスト教を厳禁する。

11・1 神尾内記元勝に替り、大河内善兵衛政勝を長崎奉行とする。

11・10 諸国の大船(500石積以上)の建造を厳禁する。

12・2 幕府、徒党取締り令を出す。

この年 幕府、長崎奉行に命じ、同地権現山に遠見番所を置く。 斧山頂に烽火場を設けて、一朝有事に諸侯来援のための報知所とする目的。 これは老中松平伊豆守信綱の建策による。

この年 江戸より久世大和守広宣、他改役等が下向し、宗門改め(各人より寺請証文誓詞血判を徴する)のために、郡中廻村を行う。 もつとも、東目筋はまだ人影薄きため、主として西目筋のみ行われる。 転宗者は寺沢時代の規定通り、すべて一向宗へ入らせ、富岡鎮道寺、一町田安養寺をこれに当てる。

この年 富岡城門下の空き地に貢米寄蔵を建て、御蔵入れが始まる。

この年 島原陣で斬首した教徒の首級を、有馬、長崎、天草の三カ所に分埋する。 天草は志岐郊外(今

は(富岡)轟松原に埋葬し、これを首塚と称する。

1939 寛永16 6・12 唐津城主寺澤堅高、蟄居を赦される。

7・4 幕府、太田資宗を長崎に派遣して、ポルトガル人を放逐させる。

7・5 幕府、重ねて令を下し、益々鎖国を厳しくする。

7・23 凶年に付き、臨時高札が立つ。

7・25 幕府、オランダ人、中国人(支那人)とのみ通商を許可する。オランダ船は平戸において、唐船は長崎においてのみ、それぞれ交易させる。

7・ 7・ ポルトガル船3艘、長崎に来る。幕府、井上筑後守を長崎に下して拒絶する。再び来た場合は、船は沈め、船員はすべて死罪にすると諭してこれを追いつ返す。

8・4 幕府、ポルトガル人との交易禁止を布告する。

8・9 幕府、肥後細川忠利、福岡黒田忠之、佐賀鍋島勝茂等九州諸大名を召し、長崎において蛮船に法令発布の旨を伝える。

10・1 島原滞留中の鈴木重成、上方代官現職のまま、新たに天草荒廢の地開発の命を承り、天草に渡り修治する。領主山崎甲斐守は、もっぱら城の修復に専念して、他事に関わる余裕がないためである。

12・ 幕府、奢侈処罰令を下し、戒めは峻厳を極める。

この年 幕府、山崎家治に命じ、熊本城主細川忠利、島原城主高力忠房と共に、それぞれ番船を出して、長崎港を警備させる。

この年 当郡の宗門改役等の下向、前年通り。

1640 寛永17 4・

肥前平戸のオランダ館長カロン、江戸に参府する。老中これに耳打ちして、商館を平戸より長崎に移すよう勧める。だがカロンは、平戸領主松浦氏の年来の交誼を想い、婉曲にこれを断る。

5・17 ポルトガル使節ベチエロ等長崎に来て、貿易の再開を求める。

5・25 長崎番船、半年勤務方に改められ、半年は山崎甲斐守及び高力撰津守、半年は細川越中守警備と決まる。

6・15 大目付加々爪民部少輔(6・14長崎入り)、ポルトガル使節を引見し、ポルトガル人が幕命に背き、邪宗を宣伝した罪を責め、貿易再開の断固拒絶を伝えるとともに、前年の予告通り執行するとの旨を厳然と宣告する。

6・16 ポルトガル使節ベチエロ以下61人を長崎にて斬る。

6・17 幕府、ポルトガル使節の残留者(下級船員)13名を邦船により放還、帰国して実情を伝えさせる。

9・25 大目付井上筑後守政重、長崎奉行柘植平右衛門正時と共に平戸に入り、突如オランダ館の閉鎖破壊を命じる。オランダ館長カロン、平戸松浦藩主の注意もあって、ただちに碇泊中のオランダ船乗組員200名を指揮して、即日倉庫の荷物を余所に移し、その破壊に着手。漸く事なきを得る。

11・24 肥前平戸松浦領主に再びオランダ館の破壊を命じる。

この年 当郡へ宗門改役等の下向、前年通り。